へ 5
1856

一夜卯喰者端

秋月の昼ようとなれていとゝ雨さへ
ふるさとの物さびたる窓の燈もなつかし
油さへなきうるる幽居を敲て嵐山史の
病中をおとなはんと百鬼夜行の時
なれどもかの東坡居士の物好
微うんとしれて行て月の耳うちよ
くのて四喰屋流行のおのをよしとはよ

[illegible]おのつから狐狸のわとも
ゆのうへ萩より[illegible]まとをとり[illegible]無乃が
夕の秋をうつす高子ハ冊なる旅宿
先ひとりとみよ雅神のもいをいとハ[illegible]
[illegible]中色引[illegible]おもかしく調の用しをを
よ[illegible]こし服[illegible]みすなりてをる菴
秋のうち[illegible]法をはりの[illegible]
[illegible]の[illegible]志の[illegible]

堪[illegible]おの[illegible]句を[illegible]
得[illegible]と[illegible]仲[illegible]
[illegible]毛[illegible]
八[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]乃[illegible]例の狸[illegible]
[illegible]
[illegible]茶[illegible]豆[illegible]の狼籍[illegible]
[illegible]三更乃[illegible]

四季の哥仙なるを袖の上に帰りて後
ながめくらすに打ながめくれるまで乃
ふ判よりうつして柿の古樹のたてきなる
似たるを何ぞ[illegible]の人のかたる
所の樹を橋屋とたづねよとあるゆ
えなり此句を題して橋仙堂
ふかせをと
花洛 紫狐庵蕪村記

四歌仙其一

春色一夢なるのうち半ばより 蕪村
ほとゝぎす 起るあけ乃夕べ 樗良
舟をして宿とるあと乃二日月 几董
紀州の桃太郎一歩一歩 嵐山
ものゝ姫おさなき頃ありて 良
牛部おもく雨の上がりて 村

ちりあてしゆみはるのやま
我もいてしの春秋をきく　董
神よりも孔明をきくと古人桶　村
見しき蓮ハ枯てあとなきを　良
小鳥まつ今宵のちつのこ　董
さのつをはせて鳴る縣井山
ゑつを弟乃常陸介よ補ふて　村
八重のさくら乃花を一片　董

矢を負ふ男鹿まて伏に　良
去もおくるる月の山寺　村
大瓶乃酒ハのつ酢なる　董
五尺の紅赤かをもを　良
備神の白田の移徒りをを　村
ゑをちまし神の白を　董
杉の枝を苔のぼる咲のうく　良
合佛ゆて死をもうこ　村

我山より帝幸の[illegible]　董
[illegible]し[illegible]露の[illegible]　良
[illegible]上の詩を[illegible]　村
竹を[illegible]　董
異[illegible]　良
訴
[illegible]より夏[illegible]　村
[illegible]田も[illegible]稲の[illegible]　董
[illegible]の服を[illegible]　良

小商人秋[illegible]　村
相金[illegible]　董
[illegible]も今も[illegible]　良
何物語て秋[illegible]　村
象[illegible]の[illegible]　山
[illegible]志賀の[illegible]　董

其二

白菓よ至りて霜置得り　嵐山

残るやなれなれの月乳ル　董

借馬よ秋を涼しくまぶて　櫻良

濃酒あると婦の人々　蕪村

小晴をとしたと燭の二所　董

ゑこゑ乃香炉ずちぬく　山

かくて世よ四位と成一を侍を　村

野上の居の色よ立つみを　良

中垣乃侍子よ蝿の二つ　山

ちのくも神のとろ的ゑ　董

よ紀僧を毎を去りゑる　村

戎の亂　けまうゑ　良

雪ふ州て宮ゑあと窓の　山

拾拾乗　雪よまの蝋の方　村

思ひあてらるる年の暮　董
のとはりけれども度柏子の色　心
散ぬるは花一時の春のみまと　良
雨て残てて暮をしる　董
春の風吳国乃貢ぶ来る　村
鼻しも宿老の初恋　心
くくの沙汰となる我恋　董
小袖賣るも世をれんはし　良

精舎のゆりし佛の高れん　山
ゆゆ切〳〵を村雨二もと　村
歌陣の和歌の書物を盗まれ　良
星の光の暁ちのく見ゆ　董
尽いとて舟出夏で失せぬ　村
如ひとて太刀をしくく　心
付江の雨降る昼の月　董
師の衰おこもる山陰乃秋　良

喰だや百里届〳〵ぬく梅を　山
掃除仕賣てうれしけのあれ　村
桃李よひの殊る多ゝ　良
花不言　春深よ　弥　董
人老を人又我を老とは　村
泥よ作をゝ亀のなさよ　良

意〳〵として柳をのく船哉　儿董
離〳〵として又蝶を待　弁　薫村
のとしのよ蛙を仕掛て　嵐山
芥のゝ〳〵さわ〳〵て實成る　摂良
よ知程と夜ハ走りてセりのて　董
出乃選ひの沙汰の近く　山

古領秋の名ちさよ縁八して　村
高きに登り物思ふ男の　董
なるよ秋や恋の思ひ遂れて　良
きときこゆ弥もとまるは乳ま　村
風のと吹みて和歌の篠　山
羽黒の鷹の磯へ高まる　良
牛弓の弦より強き地へ　董
宮袴の行俊歩とすれば　山

垣成よ麦ひ[illegible]撞ぬ　村
枝のきなれ[illegible]の白ゆ　董
乗風の鈴はせ[illegible]の　良
ひとり香[illegible]　村
加[illegible]の中[illegible]の　山
名の惜しみ[illegible]　良
鳥追ひよりみの衣　董
良家の恩よ[illegible]　村

廿須の酒の歯のうち抜けてき　良

屋敷うまやの石に火を打　董

山賊の月出る場をひそらくん　村

いつらや霧の虎吼るを多　良

やふと我よりうを我国は　董

我の為そ人と叫出る　村

米五升芋三升四つ俵そ　良

老てふ人の拍子の外　董

淀鳥羽より牛の病のそやけく　村

憂化退治の時の串び　良

暁乃小の四月を開をうう　董

何のいろおそ夏の時雨　村

おの我のを紀ひ男のあくの逢　良

しまとを塗る春の山風　山

甚 卯

花散るゝ木のもとそたよりなき　樓良

つゝのて卯木の垣の山に嵐山

摺箱の摺箱の内へ白孔雀薫村

既　満るを敷連歌一折に董

淵竹なナ三日のを作る山

鹽をあるる門口の牛　良

いるまに旅の心得を連会　董

去年の長者の蔵ふく　村

雨をうるゝあるは結ふ桂一木　良

硯具の皿を組引てあり　山

ふるは我しら方を中くなる　村

[及ひてて去のよ雪の月　董

上加茂の水をくるる手ひろ　山

萩う中一本の長毫の竹　良

[illegible]の秋うらみて[illegible]　董
[illegible]の秋無[illegible]　村
きひしさや[illegible]雨　良
[illegible]出る芦乃家　董
黍園子三日の糧とたんなり　村
[illegible]昼のとも　良
鍼立のもる加[illegible]衣　董
[illegible]猫のもんかよ　村

[illegible]と庵の木槿よ風の音　良
新聖霊の給仕[illegible]し　董
能役居秋の景[illegible]　村
月を惜の旅の宿の床　良
世のうへの人の[illegible]　董
頭[illegible]　村
銀の鉢よ[illegible]　良
長[illegible]の軒の雨　董

かゝるものゝ成りても花の匂ひ　村
田の刺鍛冶の鍛ふやあらん　良
啼鳥我もまよふ乃我移り　董
春の街をくゝる　流れ去る　良
巻ゝ上げて柳の緑の戸　村
主客の聴いとまなしとて　筆

安永癸巳九月發行

郭文の勝具なれハ鬼貫の格子を
ゝハくゝみしやゝ知るゝ山みよりの山
ぬゝみも東窟のゆあにたゝ素あら
しの中の雲乃ゆくゝ東にたゝ
ぬるしをあるのいとはるれハ
ちゝて新々美歌平おゝ淋し
人ゝ花さゝらの部をあくのは

しとかいたけ一帖よりして臥柱
のようなるものおりひろちたとう
くるるにあ煙眼を遮き絹
衾窗を蓋ひ荏苒として去れ
くるに日にゆくとうたち蕭條と
物うくなる面を曉ぜられて
ふるあるもふるる花乃月をうらみ

て来るうに上る時をるおみし
ある人物寂のんさを見てこみ
白つきをよとこひおこせる海を
れよけ見れいを澤淋湯として
雲外の一多腦をちはし言下に
一向を仕所謂物尾をもて貂を強
たるたるを門下の二三子

廿三年四と申けゆゑまたにやの
て三十六句さみちあいとよし花
櫻乃ほつ〻附して則花鳥篇と
題号して我跡懈怠罪を謝せ
るものしるしの事

壬寅皐月　　蕪村識

花櫻帖

浦里乃さゝ波遠の海苔の味　大石　士川
花をとゝ〻菅の宇八九日　浪花　雄山
もの思ふこゝろむ筏や大井河　延年
葛城や古寺の雲ちぎれ　大和　何来
ゆくゝ垣を仕舞ふ藤　大石　佳則
雪ふむさくら人ゝ三月　胡柳
あたゝかに咲ぬ侍ぬ外　宇多ハラ　野菊

さうなる取いたりて紅山桜　丹ミヤツ　東渚
岸うの海のうつりもあはれ　、　路景
秋住家ものの数に二百　ヤマト　如水
さとれいたとき一樹乃さくら　大和　守明
僧寺に帰る月あの梅うち　巴
はとに起て見れい花ちる高富　湖嵩
月入ぬい花ちう四てさくら　十二八　うん
草砂と見て見ぬの河　大石　士香

舟さして花さと月さ河にうち　秋則
花と見て帰るしら山の月　雄二
米うく水うち山の山　佳棠
掛茶屋の松ものあて鶴のさく水　吾琴
花に泊ていさうう逝るこてう　青荷
花ふ神さるあ日入片なう　古好
うたてきものさうやきみ　女　ちの
ゆき乃遠巡とてさくら　金篁

きのもしてさてもとの男子　春坡
ちれいさく[illegible]雪入山樓　心頭
掃庭さ面ゆきの雪と乳　銀柳
いろ〳〵入人見[illegible]もの山路うゝ　女　小いと
遥さらに廿日入月のあけ方乳　爰鳥
ちるとゝ〳〵ゝ面もひゝもゝ梅　小華
乳の香ゆさてに吹入さる時　松化
花さ高て月に地ゝゝ本陰乳　雪居

ゆさてに乳まと追ゝ礫ゝ
鄙く入湯さ伏してさてゝ小　是岩
さてゝ咲中ゆ携夫ゝ飯りゝ　舞岡
おりひはゆく人伴ひてさてゝ物　宮ツ　山呼
乳て物さてゝ[illegible]乳ゝとゝ乳後　維駒
物さてゝゆ檻ゝ君ゝ乳　口子公　柳女
溜池ゝこゝゆ乳さてゝ小　桃葉
舟出ゝ入日入あのさてゝ乳　大石　附鳳
曽西

移りて花の梦を尋ぬ　東助

櫻移りの木ゝの末入一摘　さゝ女

舟出して吉野山さくら見すてゝ　吞獅

面の白やむすび白ふる南良の雪　徳埜

ゝのつゝみにもれし山桜　文皮

雲と見雪と散りかゝる山さくら　女　石松

花を見て帰宅を忘れ宵月夜　十八　百樓

ものゝ大和一の内の名所巡り　紫汀

西山の花の明る日入る　大石　士巧

さゝ波に岸を山の花　菊十

ちりそゝ人の入さゝる　芙子

花の浪ひたひたと高山　巴江

谷水へ入る花の名残　雷子

散うゝの花を見るゝ行人　五雲

散花やさゝ波の通ひの水　之兮

花ちるを懐ふ花の名残　尼寄　春洲

ひさ〳〵やいろやおりの乃信を
ぬ〳〵まいて又れいさ〳〵ハ咲なく　仙臺　秋末
白ゝの根とおろしのうさ〳〵曲　イタミ　東風
はつ〳〵に源及さ花ゝと立て見ゆ　眠樹
山おろし寒くさ葉や花の梢　自笑
早飯の蕾さあらぬやゆきうら　三角
誠乃さゞ〳〵咲りゆ第二三編　和流
　　兵コ　栗屯

壹里乃花靜さゝ年の貝　里由
良ゝ望乃花ふ〳〵うゝ花のうと　清吏
さゝ花乃梅〳〵ゝ山伏さ　石池
日和〳〵やと魚花ゝ乃さ〳〵物　公遠
先き〳〵まて友さ乃雪乃花の山　文長
鶯戸出花ゝ乃戸を花ゝ　婆雪
途さ晴て杉ゝ乃ゝ乃花　存周
花ゝ乃て飯ゝ乃ゝ乃ゝ乃松の風　月居

ハタ〻ゝ花を離て天乃糸　十二八　正名
けしきも二ゝとこゝもとさゝれて　通女
ちるハく花の外ハ幡そゝり　梅亭
土地峠夕山陰乃逆さゝれ　高サユ　祢舟
片神ハぬしてゝみを山さゝら　其答
ちゝ泊ゝ寄めゝさゝ春山福　魚赤
花さゝ寒ゝのゝしろく入日哉　田福
黄昏乃智さゝ野殿やさゝれゝ　林亭

さゝ〻咲山る住とゝもろく詠川　獣子
社ゝ町乃門ゝ新ゝゝ山さゝれ　里曉
猶ゝゝあゝ月ゝ花のもと　十二八　旧國
入月乃さゝてゝよゝきハ坤　幻住庵　臥央
花落花開花ゝ酔
還鶴子日玄貝家
子日乃酒ゝ賣ハ誰ゝ花の蔭　道立
十字御
花ゝ酒汗しゝゝ半のひゝく日ハ　夢太

光台院

こつもなきころの世の梅咲けり　暁臺

右文音乃二句

一休會裏ニ在軸

まれ正月しり茶をむせしき
ほう見えるの主たる坊主の法
世の衣はとめ賦参　經陀羅尼
しやるものなこく
精楽田舎乃こゝひもの人八
こゝろのこちそうし

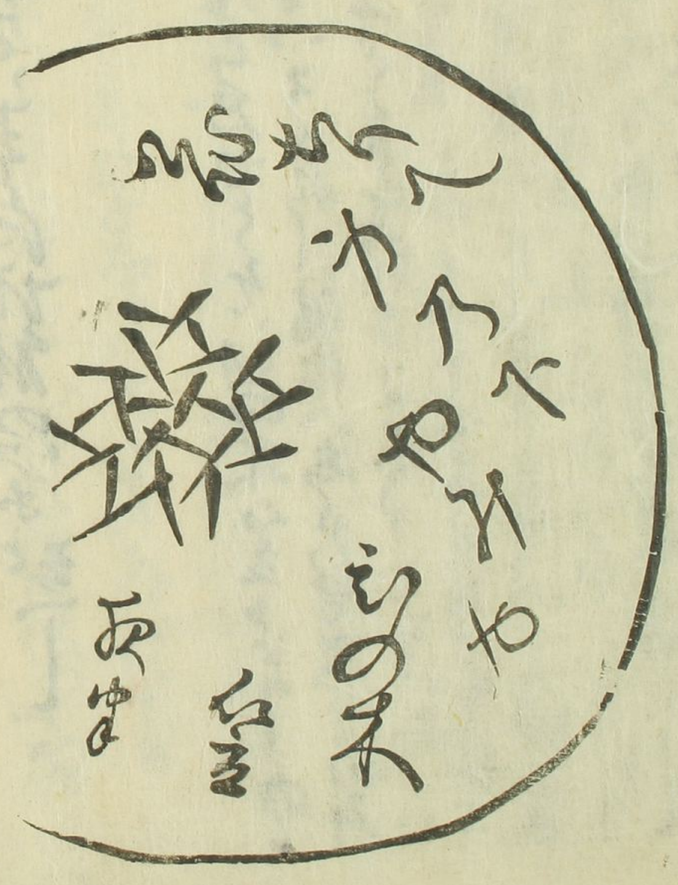
俳諧の活のつゝむ
さよくはおあけほのよみひと考
此亭ハて予先俳の居心こ
俳竹の御家ニあいて諸宮
食子ハ撒ら小せとくのや
その一声をおほにしく
焦尾相のそらくをたく一曲の
子弟もする艶菊亭

右の文ハ其角ヶ焦尾琴ニ於て
俳諧の一般記とも為へし

なのりをしてろうぜし賊徒をしりぞく。
家をもとめてのちにもとめんとのぞみ
壯麗を自慢せんとうやまひ
さいろくの伏波の軍義當
益性といふるうとうのたまはつて
致をしるし古市河掃部介
中しら家をあとにとりたてを
つきやしらてとしくる優侍のたち

やうにいまそこに旅籠の家と云し

さかりをしてこの末のことよりの
旅まいりのうれかはしきのみ
ありてうきをあつまりさくるとそのもとは
とも也とかしらやあんをとかして
ぬひたてをかこともえそさまつつまい煙霞
我をもて吉幸負をもたまはかりをうあり
さ侍家と今更我のみおろかなるやうにて
人まあおとんおのそもあらはさ
なす。



宗因

兼村

八幡

白池

住吉

金堂

湖水

湖・富

みすまをとさむてまも春のゆく水の
　吳楚乃際ゝ流るらむ雲　田福
梅ゝと枯世の春ゝ忘れてゝ
　飯をゝさらに大イゝ　我則
ゝ乃ゝ乃て江湖所のるとゝゝ　之兮
柳ハみどりの花ハ白ぬ　是岩
所車乃彩雲と峰乃ゝらむ　能三
新ゆ春世ゝ春世ゝ乃て　正巴
　　維駒
　　吾琴

みこゝろに影沈る朧月　月居
　古乃林の夜ゝ乃る板　爰鳥
所窓乃俤ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ　紫汀
　春ゝ咲ハ泊てれ〳〵討　銀樹
ゝみ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　自矣
　ゝしゝ後乃ゝ春ゝ乃ゝ　住棠
遠〳〵見ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　春坡
　ト部乃家ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　儿童

中あの形入相あやまるかと保
そとは見せしとさぬつけむ
結ぶる時も師走を指込て
三笠船入鮒のさて賣
はらくとあられの降る冬の月
うぶしも苦ふを焚住まてあ
盃瓶へ肩のの拭ふうの宗
さとしい多いだんち入取

雪居　百池
老而　魚赤
蕪村　春坡
　　松化

宗因もきのふ江戸うらの別れて
長堂信もよいちとうみ
俳あくさくの木末元のもと
たうたはやとまりの二ぢ

華花
寧町
巨立
吞獅

たくみ一ぱの名家利ぶ絵画
ぎいめう社見る目乃
まんぐ再てかぐる

曽呂利狂歌話

繪全部五冊

大閤秀吉その時伽羅号利休居士清閑格歴して
名所旧跡を探る程奇抜滑稽。あるいは人元員之
宮家小町をもじめ名ある歌人抔で人を挙げ其
事に小説奇。女を鬼とし歌を詠じ又は出歌が面白き事と
なし
子者ふ跟しぶ。皆ひとぐの漢ろく大笑うる書なり

川島信清画

商人軍記

一名出世早合点

全部 五冊

人書商人分分商ざるたぐうて中て家義て矣い。好の
道より扶多して家業の妨ともなり。求も自業しの
矣者銀雑幸甚して分限者とる先祖の家名廃
不幸ぶき繁昌とも。雑俳が却て吉様とる
の類三冊の商人小説て述れと見る人抔のいろく教訓と
もなりまく矣しても大福長者となり一生曲度
こ商ごてくるまで出世五分とるの様とる